

新潟県における高校生のエイズに関する調査

久保田美雪・渡邊 典子・小柳 恭子

新潟青陵大学看護学科

新潟市民病院

A survey on the AIDS at high school in Niigata prefecture

KUBOTA Miyuki¹ · WATANABE Noriko · OYANAGI Kyoko

NIIGATA SEIRYOU UNIVERSITY
DEPARTMENT OF NURSING

NIIGATA CITY
GENERAL HOSPITAL

Abstract

We carried out questionnaire concerning AIDS at high schools in Niigata prefecture, and investigated the consequence. The number of the pupils who know what kind of disease AIDS like, is 1064 (58.5%), the number of the pupils who don't know is 121 (6.6%), and neither of them is 636 (34.9%). We investigate the comparison between the pupils answered that they have knowledge of all pupils answered that they don't. Most of the source of the information is school (71.8%). The pupils answered that they know AIDS much more worry about the route and the right knowledge of infection. In case, some of their family or acquaintance is infected, they will have a passive opinion. When they are infected themselves, whether they have knowledge of AIDS or not, 50% of have positive opinion, and, about 10% of them have the opinion that they will try to escape from reality.

As a conclusion, the source of the information about AIDS that the pupils of high school have, is school. And, it is indicated that the education about AIDS at school play a very important part for high school students.

Key words

High school students AIDS education about AIDS knowledge

要 旨

新潟県内の高校生（有効回答数1821人）に、エイズに関するアンケート調査を実施し検討した。その結果、エイズがどのような病気か知っていると感じた人は1064人（58.5%）、知らないと感じた人は121人（6.6%）、どちらともいえないと感じた人は636人（34.9%）であった。知っていると感じた人、知らないと感じた人で比較検討した。知っていると感じた人のエイズの情報源は学校が71.8%と最も高かった。知っていると感じた人の方が感染源に対する正しい知識と感染に対する不安が高かった。また、家族や身近な人が感染した場合は受容的な意見を持っていた。自分が感染した場合は、知っている、知らないに関わらず前向きな意見は5割、現実逃避の意見は1割程度みられた。

以上より、高校生のエイズに関する情報源は学校であり、学校における更なるエイズ教育の重要性が示唆された。

キーワード

高校生 エイズ エイズ教育 知識

はじめに

近年、若者の性行動では「『性の自由化』が進み、低年齢化、マルチパートナー化、及び、カジュアル化が強まっている」¹⁾ことから性行動の活発化がみられ、それに伴う性行為感染症、特にHIV感染の危険性が指摘されている。1987年より学校エイズ教育がスタートし15年以上経過したが、若者の性行動から性行為感染症、特にエイズに対する危機感がみられないようである。木原は、²⁾「わが国は、20世紀末からHIV感染の拡大しやすい環境が急速に整いつつあり、このままでは、21世紀にはHIVの本格的流行期を迎える可能性が高い」ことを指摘している。山中は、³⁾「現在日本でのHIV感染の拡大を考える際、10代後半から20代全般の性行動や性意識を検討する事が重要な課題である」と述べている。そこで今回、私たちは高校生のエイズに関する意識を明らかにし、今後のエイズ教育を検討するために、エイズをどのように考えているかについて、新潟県の高校生にアンケート調査を実施し、検討したので報告する。

I. 研究方法

1. 調査対象及び方法

調査対象は、新潟県内の高校生1959人である。調査期間は、2000年4月から2001年3月である。性教育の機会に対象となった高校生に調査用紙と封筒を配布し、プライバシーを守り及び解答内容の正確さを期するために、記入後各自封筒に入れてもらい回収した。そのうち有効回答数は1821人(93.0%)で男子904人(49.6%)、女子917人(50.4%)であった。統計学的分析は統計パッケージSPSSを用い、回答の差の検定には χ^2 検定を用いた。

2. 調査内容

調査項目は、①属性、エイズに関して②どのような病気か知っているかどうか③情報源と感染源に関する知識④感染に対する不安⑤検査について⑥感染した場合の対応について回答を求めた。

II. 結果

1. 属性について

対象の属性は、表1に示すとおりである。

表1 対象の属性 n=1821

項目	人数 (%)
性別	
男子	904 (49.6)
女子	917 (50.4)
年齢	
15歳	274 (15.0)
16歳	727 (40.0)
17歳	630 (34.6)
18歳	190 (10.4)

2. エイズがどのような病気か知っているかについて

エイズがどのような病気か知っているかについて、知っていると答えた人は(以下、知っている群と略)1064人(58.5%)、どちらともいえないと答えた人は(以下、どちらともいえない群と略)636人(34.9%)、知らないと答えた人は(以下、知らない群と略)121人(6.6%)で、知っている群が最も高かった。

知っている群では、男子520人(48.9%)、女子544人(51.1%)、どちらともいえない群では、男子303人(47.6%)、女子333人(52.4%)とほぼ同じ割合だった。知らない群では、男子81人(66.9%)、女子40人(33.1%)と男子のほうが高かった($p < 0.01$) (表2)。

表2 エイズがどのような病気か知っているかについて (n=1821) 人 (%)

知っている群		どちらともいえない群		知らない群	
1064		636		121	
(58.5)		(34.9)		(6.6)	
男子	女子	男子	女子	男子	女子
520	544	303	333	81	40
(48.9)	(51.1)	(47.6)	(52.4)	(66.9)**	(33.1)**

** $p < 0.01$

以後、どちらともいえない群は、エイズに関する認識が曖昧で不確かな認識を持っている群だと考えられ、どちらともいえない群を除く、知っている群と知らない群とで比較した。

3、エイズの情報源と感染源に関するエイズの知識について

1) エイズの情報源

エイズの情報源に関して、知っている群についてみると「学校」が71.8%と最も高く、次いで「テレビ、ラジオ」66.8%、「週刊誌・雑誌」20.5%、「友人」12.9%の順であった。「学校」やマスメディアである「テレビ、ラジオ」から6~7割の高校生がエイズの情報を得ていた(図1)。

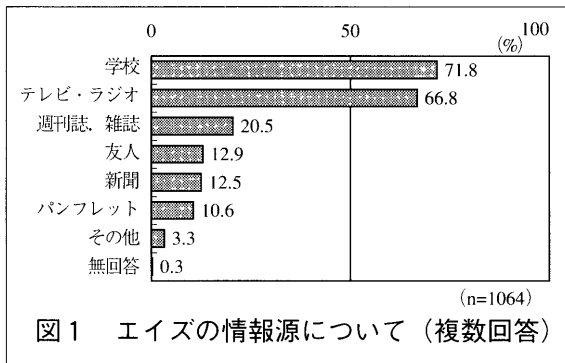


図1 エイズの情報源について(複数回答)

2) 感染源に関するエイズの知識

エイズの感染源の知識について、感染源となる項目についてみる。「無防備な性交渉をする」は知っている群91.2%、知らない群73.6%、「血液が傷のある皮膚につく」は、知っている群86.5%、知らない群76.9%、「血液が傷のある皮膚につく」は、知っ

ている群86.5%、知らない群76.9%と知っている群の方がいずれも高かった(p<0.05)。

次に感染源とならない項目についてみる。「軽いキスをする」は、知っている群5.5%、知らない群14.0%、「せきやくしゃみから」は、知っている群3.6%、知らない群12.4%と知らない群の方が高かった(p<0.01)。「同じ蚊に刺される」は、知っている群36.7%、知らない群34.7%とほぼ同じ割合だったが、それ以外の感染源とならない項目は知らない群の方が高かった(図2)。

4、エイズ感染に対する不安について

エイズ感染に対する不安について、「不安を持っている」は、知っている群40.6%、知らない群28.1%と知っている群の方が高かった(p<0.01)。「不安を持っていない」は、知っている群59.0%、知らない群71.1%と知らない群の方が高かった(p<0.01)(図3)。

5、エイズ検査について

現時点でエイズ検査を受けようと思うかについて、「受けようと思う」は、知っている群15.6%、知らない群14.0%であり、ほぼ同じ割合だった(表3)。

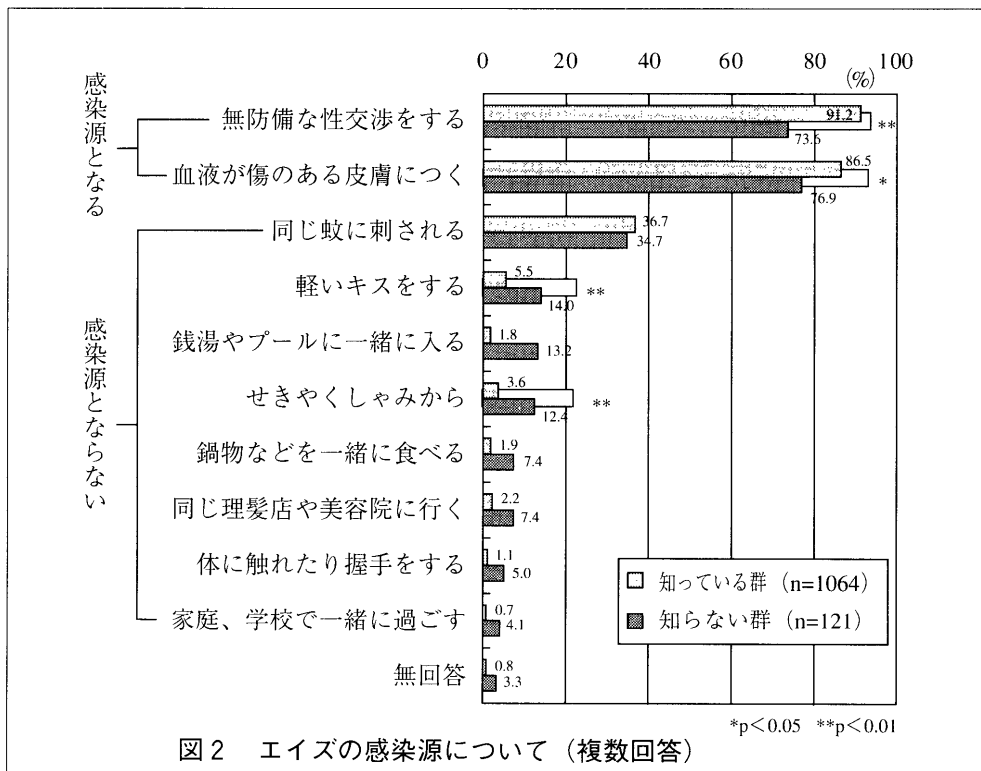


図2 エイズの感染源について(複数回答)

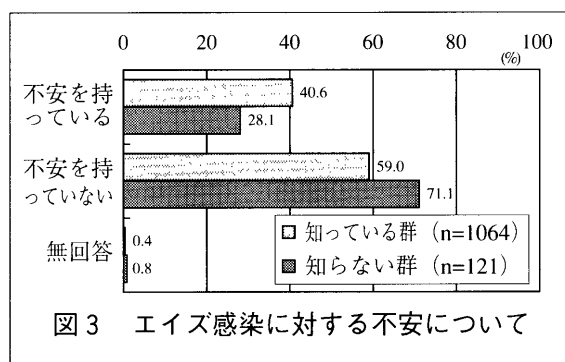


表3 エイズ検査を受けようと思うかについて

	人 (%)	
	知っている群 n=1064	知らない群 n=121
受けようと思う	166 (15.6)	17 (14.0)
受けようと思わない	893 (83.9)	104 (86.0)
無回答	5 (0.5)	0 (0)

表4 エイズ検査を受けようと思わない理由について

	人 (%)		有意差
	知っている群 n=893	知らない群 n=104	
自分には関係ない	511 (57.2)	73 (70.2)	*
受けても結果を聞くのが怖い	181 (20.3)	17 (16.3)	
すでに受けた	9 (1.0)	2 (1.9)	
その他	145 (16.2)	10 (9.6)	
無回答	47 (5.3)	2 (1.9)	

* p<0.05 **p<0.01

エイズ検査を受けようと思わないと答えた997人の理由について、「自分には関係ない」は、知っている群57.2%、知らない群70.2%と知らない群の方が高かった ($p < 0.05$)。「受けても結果を聞くのが怖い」は、知っている群20.3%、知らない群16.3%であった。受けようと思わない理由は、知っている群、知らない群とも「自分には関係ない」「受けても結果を聞くのが怖い」の2つではほぼ8割を占めていた。「その他」の内容としては、「性交していないから」「今はまだ必要ではない」「面倒」などという記述がみられた。注目されるのは、検査をすでに受けた人が、知っている群9人 (1.0%)、知らない群2人 (1.9%)の回答があったことである。今回、性行動に関して調査をしておらず、検査を受けた人達との性行動との関連をみることはできなかった。(表4)。

6. エイズに感染した場合の対応について

エイズに感染した場合の対応について、家族、身近な人、自分の3つに分けて検討した。

家族がエイズに感染した場合の対応について、受容的意見である「今まで同様の生活を続ける」は、知っている群82.3%、知らない

群62.0%と知っている群の方が高かった ($p < 0.01$)。否定的意見である「同居するが生活の場をわける」は、知っている群7.1%、知らない群14.0%、「別居する」は、知っている群3.1%、知らない群14.9%とどちらも知らない群の方が高かった ($p < 0.01$)。「その他」の内容としては、「分からない」「同居するが気をつける」「避けてしまうかも」などという記述がみられた(表5)。

身近な人(友人、学校の人など)がエイズに感染した場合の対応について、受容的意見である「今まで同様の付き合いをする」は、知っている群82.4%、知らない群69.4%と知っている群の方が高かった ($p < 0.01$)。「なるべく付き合わないようにする」は、知っている群8.6%、知らない群19.8%と知らない群の方が高かった ($p < 0.01$)。「一切の付き合いを止める」は、知っている群1.6%、知らない群5.8%であった。「その他」の内容としては、「分からない」「気をつけながら付き合う(血液など)」「避けてしまうかも」などといった記述がみられた。

自分がエイズに感染した場合について、前向きな意見である「今までと同様に付き合いしていく」は、知っている群58.3%、知らない

表5 エイズに感染した時の対応について

	人 (%)		
	知っている群 n=1064	知らない群 n=121	有意差
＜家族が感染した場合＞			
今までの生活を続ける	876 (82.3)	75 (62.0)	**
同居するが生活の場をわける	76 (7.1)	17 (14.0)	**
別居する	33 (3.1)	18 (14.9)	**
その他	70 (6.6)	11 (9.1)	
無回答	9 (0.8)	0 (0)	
＜身近な人が感染した場合＞			
今までの付き合いを続ける	877 (82.4)	84 (69.4)	**
なるべく付き合わないようにする	91 (8.6)	24 (19.8)	**
一切の付き合いを止める	17 (1.6)	7 (5.8)	
その他	73 (6.9)	5 (4.1)	
無回答	6 (0.6)	1 (0.8)	
＜自分が感染した場合＞			
今まで同様に付き合う	620 (58.3)	61 (50.4)	
知らない土地へ行く	163 (15.3)	23 (19.0)	
家族とは同様の付き合いをするが、学校は辞める	133 (12.5)	15 (12.5)	
家族と別居生活をする	52 (4.9)	10 (8.3)	
その他	78 (7.3)	11 (9.1)	
無回答	18 (1.7)	1 (0.8)	

* p<0.05 **p<0.01

群50.4%であり、両群ともに最も高かった。現実逃避の意見である「知らない土地へ行く」は、知っている群15.3%、知らない群19.0%であった。「その他」の内容としては、「分からない」「死ぬ」「自殺する」などといった記述がみられた。

自分がエイズに感染した場合の相談相手について、「両親」は知っている群34.6%、知らない群35.5%と最も高かった。次いで、両群とも「医師」「友人」「恋人」となっており、その他の相談相手は10%にも満たなかった(図4)。

自分がエイズに感染した場合の身近な人に望む対応について、「今まで同様に付き合いをしてほしい」は、知っている群70.2%、知らない群57.0%と知っている群の方が高かった(p<0.01)。「相談相手になってほしい」は、知っている群28.6%、知らない群33.9%と知らない群の方が高かった。「そっとしておいてほしい」は、両群ほぼ同じ割合だった(図5)。

以上より、家族や身近な人がエイズに感染した場合の対応として、知っている群は受容的意見を持ち、知らない群は否定的意見を持つ傾向にあった。しかし、自分がエイズに感染した場合は知っている群、知らない群に関わらず前向きな意見は5割であり、現実逃避の意見が1割程度あった。

IV、考 察

1、エイズがどのような病気か知っているかについて

我々の調査では、エイズがどのような病気か知っていると答えた人は、58.5%であった。それに対し、高校生2956人を対象とした⁴⁾ 劔らの調査では、エイズを知っていると答えた人は94.3%と我々の調査よりもずっと高い結果であった。このことについて我々の今回の調査では、どちらともいえないと答えた人が34.9%あり、調査用紙の選択肢の違いだと考える。

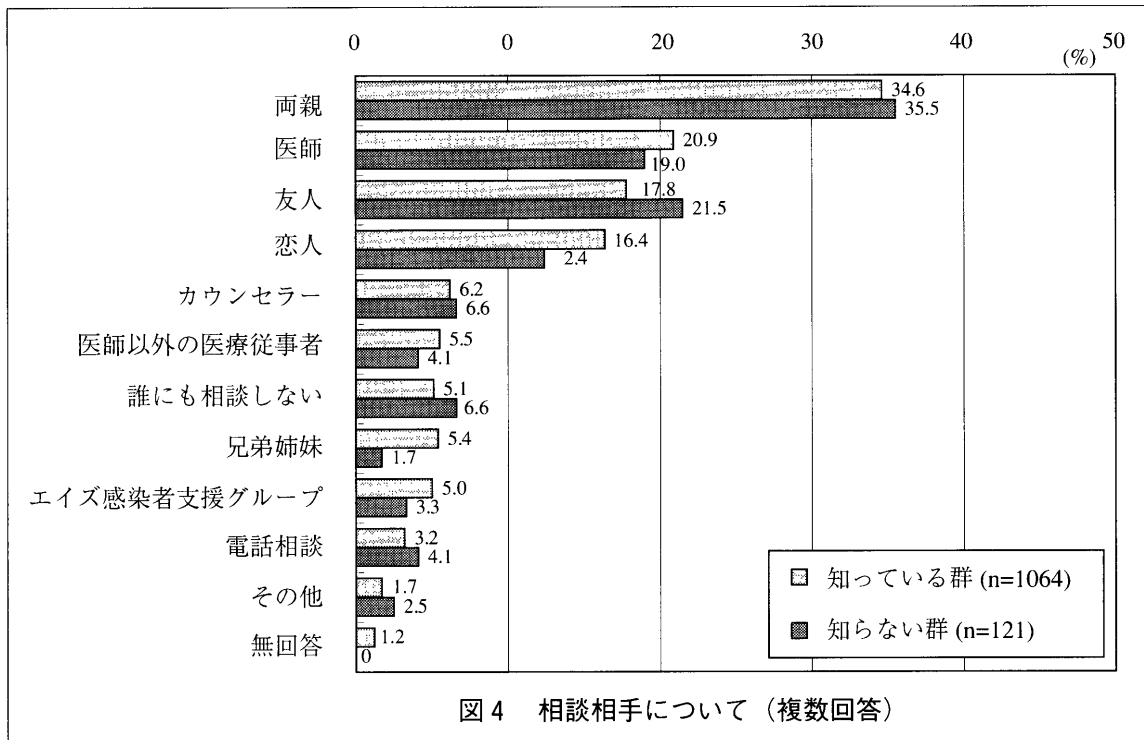


図4 相談相手について (複数回答)

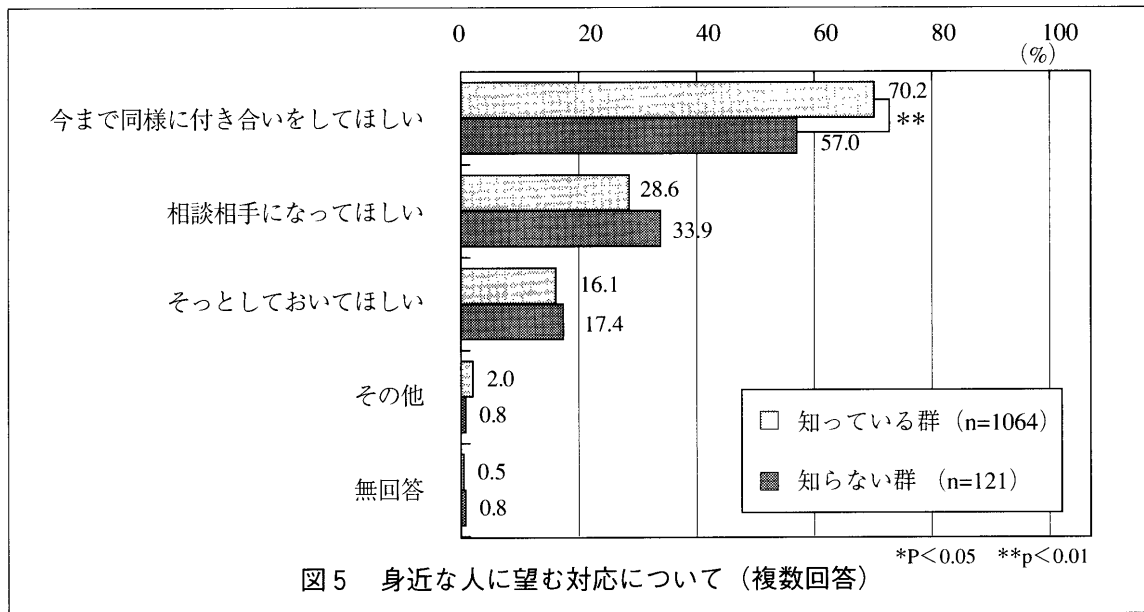


図5 身近な人に望む対応について (複数回答)

知らない群では女子より男子の方が高く性差がみられた。このことは、落合ら⁵⁾が青年たちの性について知りたい内容として「女子では『妊娠や出産』『避妊』が性行動の活発化に伴う関心事として、男子では『マスターベーション』や『体の仕組み』など身体そのものについて知識を求めている」という報告や、日本性教育協会の「男子はその前の段階である『どのような異性と交際すればいいか』や『セックスはどのようにすればいいか』とい

ったいわば空想論的な部分が先行している」という報告にみられるように、男子と女子では性の関心事が違うことを反映するものである。男子は性行動そのものや交際の仕方に関心をおく傾向にあり、女子は性行動に伴って自分自身に起こりうる問題に関心があるため、知らない群で男子が多い結果になったと考える。

2、エイズの情報源と知識について

高校生の一般的な性についての情報源は、⁷⁾ 剣らの調査によると、「友人・先輩・後輩」が68.4%と最も多く、次いで「テレビ」61.9%であり、「学校の先生」は28.8%であった。また、都筑ら⁸⁾の調査でも「友人(先輩)」「雑誌」が4~6割であるのに対し、「学校」は約1割程度と低いことが明らかとなっている。今回の我々の調査では、エイズの情報源は、「学校」「テレビ、ラジオ」が6~7割で上位を占め、「友人」は1割と低く、情報源として「学校」と「友人」が逆転していた。これは、性に関する情報の中でもエイズに関しては学校において情報を得ていると考えられる。日本性教育協会⁹⁾は、「さまざまな情報源がある中で、自分の感情や意識に最も納得しやすい情報源からの情報を強く受け止める。」と述べていることから、高校生は学校でのエイズ教育を納得し強く受け止めていると考えられる。つまり、エイズについては学校でのエイズ教育が高校生の情報源として有効と考えられる。

さらに、「テレビ、ラジオ」は6割、「週刊誌、雑誌」は2割あり、これらのマスメディアから情報を得ている人も多く、マスメディアの影響は無視することはできない。文部省¹⁰⁾では「マスメディアの発達により大量の性情報が無秩序に流出しており、(中略)自分に必要な性情報を選択すること自体が困難な状況であるだけでなく、性情報に押し流され自己を見失い困惑している者もいる」と指摘している。また、斎藤ら¹¹⁾は「マンガや週刊誌からの性情報をお互いが得た知識として共有し、誤った知識や理解であっても、それを修正する教育を受ける機会に乏しいこと」も指摘している。これらを考え合わせると、大量の性情報が無秩序に流失している現代だからこそ、正しい知識を与える専門的な教育が必要となっている。さらに、大量な情報の無秩序な流出に対し、「興味本位に駆り立てるマスコミなどからの不確かな性情報をより分ける力」¹²⁾であるメディアリテラシーを含めた教育の重要性もさげばれている。今回の調査から高校生のエイズの情報源が学校であることを考えると、学校エイズ教育は重要な役割を持

っている。今後、学校エイズ教育では教師から生徒へという一方通行による教育だけではなく、ピアカウンセリングなどを取り入れていくことも必要である。

エイズの感染源の知識では、知っている群の方が正しい知識を持っていた。しかし、感染源とならない項目「同じ蚊に刺される」では、両群ともに約3割の人が感染源になると答えている。これは、エイズの感染源が血液であることの強調が影響していると思われる。基礎的知識だけでなく日常生活での具体的内容に関する教育の必要性も痛感させられる。

3、エイズの受け止め方について

エイズ感染に対する不安では、知っている群の方が不安を持っていた。山崎¹³⁾は、若者に見られる性行動の特徴として「性行動の活発化、多数の相手を同時に重複して持つというカジュアル化、避妊や性感染症予防をしない・相手任せにすることや性知識の貧困による無防備さ」を挙げている。この山崎の指摘するような性行動はエイズ感染の増加につながることである。知っている群は、エイズ感染に対する不安が高く、このような性行動にブレーキがかかると思われる。反対に知らない群は不安が低く、このような性行動をとりやすい一要因となると推察できる。

エイズ検査を受けようと思うかでは、両群ともに大部分の高校生が受けようと思っていない。しかし、2000年の調査で、「女性のクラミジア感染症は10代に多く、全体の53.4%」¹⁴⁾を占めており、「性感染症の広まった国でエイズが流行るのは世界の常識」¹⁵⁾といわれている。山崎の指摘するような若者の性行動の現状を考え合わせると、性交経験者にはエイズ検査も含めた性行為感染症の検査の受診を勧めることが重要である。特に、性行為感染症に感染しても症状が出にくい女性は、その必要性を認識させることが重要である。そのためにも、検査を受けることを阻害している要因を把握する必要がある。

エイズ検査を受けようと思わない理由では、知らない群は自分には関係ないと思っている傾向が強く、エイズに対し自分たちの問題として感じていないことが伺えた。日本家

族計画協会¹⁶⁾では、「若者はHIV／エイズその他の性感染症の診断・治療を受けるうえで、たとえそのサービスがあったとしても、特別な困難に直面する。彼らは一般に、性感染症の症状や治療の必要性、どこに行けばそのためのサービスを受けられるかなどの情報をもっていない。また、ケアを受けるのに積極的ではない。」と指摘しており、知識、情報不足が受診行動を低下させ、性行為感染症を増加させていると考えられる。また、内閣府が実施したエイズに関する世論調査¹⁷⁾でも、保健所での匿名・無料検査は7割以上の未成年者が知らなかったことが明らかとなっており、情報伝達方法を再検討する必要がある。さらに今回の調査で知っている群、知らない群に関わらず「受けても結果を聞くのが怖い」が、両群ともに2割前後みられた。このことは赤枝¹⁸⁾が「いつか発病する怖さよりも、事実を知ってしまう恐怖の方が大きいと感じている人が多い」という心理状況の一面を、若者がエイズ検査を受けない理由として述べている。これより、エイズ検査のことだけを教えるのではなく、結果が陽性だったあとのフォロー体制を伝える必要がある。そのために、フォロー体制の整備、充実が望まれる。

4、エイズに感染した時の対応について

家族や身近な人がエイズに感染した時の対応では、知らない群の方が否定的な意見を持っていた。このことは文部省¹⁹⁾の「エイズに対する知識不足や誤解から、患者・感染者に対する偏見や差別が生じている」ということから、エイズの知識を得ることが差別や偏見の払拭につながると考える。また、地域におけるサポートや支援体制の充実はいうまでもない。

今回の調査では、自分がエイズに感染した時の相談相手は、「両親」が最も高く、薙野²⁰⁾らの「思春期の性に関する不安や悩みは、密やかに友人や電話相談することがほとんどである」とは異なっていた。これは、性一般とエイズに感染した場合の相談者の違いをあらわしている。その背景には、エイズを重大な病気と捉え、身近な肉親に相談しやすいので

はないかと推測できる。そのようなことからエイズに関する正しい知識の普及は重要である。

おわりに

今回の調査から、エイズの正しい知識を得る重要性、必要性が再認識され、学校エイズ教育は重要な役割を持っていることが確認できた。一生涯において思春期の時期は性に目覚める重要な時期であり、性に関するつまづきや誤りはその後の人生に多大の影響を与える。エイズ教育は性に関する全般的な教育とも密接に関わっており、性は生きる性につながる教育となる。エイズ教育の充実には性にかかわる教育の充実とともに求められる必要がある。

エイズの受け止め方であるエイズ感染に対する不安や、検査を受けようという動機は性行動とも関連していると考えられる。今後は、性行動との関連についても検討を重ねる必要がある。

謝辞：最後に本調査にご協力いただきました高等学校の諸先生方、高校生諸君に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 2) 木原雅子：日本の若者の性行動とHIV／STDを考える “HIV&Sex in Japan” Survey (松本清一監修：アジアの性科学研究)。東京：フリープレス；2002。p.84-88.
- 3) 山中京子：若年者とHIV感染—性行動の現状と予防介入の課題—。周産期医学 2002；32(2)：159-164.
- 4) 劔陽子：北九州近郊地域における高校生の性行動・性意識調査から。Quality Nursing 2002；8(11)：5-12.
- 5) 落合良行、伊藤裕子、齊藤誠一：ベーシック現代心理学4 青年の心理学〔改訂版〕。東京：有斐閣；2002。p. 81-83.
- 6) 財団法人 日本性教育協会：「若者の性」白書第5回 青少年の性行動全国調査報告。東京：小

- 学館；2001. p. 72-76.
- 7) 前掲4) 5-12.
- 8) 都筑芳子. 宝田智恵子. 河合久代ほか：群馬県における平成12年度高校生の性意識・性行動に関するアンケート調査. 思春期学 2002；20（2）：293-295.
- 9) 前掲6) 102-105.
- 10) 文部省：学校における性教育の考え方、進め方. 東京：(株)ぎょうせい；2001. p.1-8.
- 11) 齋藤益子. 木村好秀：高校生の性意識と性行動に関する実態. 思春期学 1999；17（2）：263-271.
- 12) 高村寿子：性：セクシャリティの看護 QOLの実現を目指して. 東京：建帛社；2001. p.65-66.
- 13) 山崎明美：日本の若年者の性行為感染症の現状と「性教育」の課題. Quality Nursing 2002；8（11）：53-58.
- 14) 家坂清子：若年者のSTD予防教育 思春期学 2001；19（1）：15-18.
- 15) 熊本悦男：日本経済新聞. 2002年9月3日
- 16) 社団法人 日本家族計画協会：世界の若者2000. 東京：社団法人日本家族計画協会；2001. p.10-12.
- 17) 京都新聞：2001年3月25日.
- 18) 赤枝恒雄：子どものセックスが危ない. 東京：WAVE出版；2002. p.86-102.
- 19) 前掲10) 1-8.
- 20) 薙野ミエ子. 上田公代. 尾道三一他：高校生の性の悩みと相談相手に関する考察. 思春期学 1993；11（1）：91-106.
- 27) 高波真佐治：10代の性感染症. 周産期医学2002；32（4）：479-483.

参考文献

- 21) 木原雅子：低年齢化した若者の性行動とSTD対策. ベレネイタルケア 2002；21（6）：24-28.
- 22) 近藤智春：エイズ教育の今日的課題. 思春期学 2002；20（1）：188-192.
- 23) 黒島淳子：思春期の性意識と性行動. 産婦人科治療 2000；81（2）：144-148. 2
- 24) 力武由美：思春期のセクシャリティとジェンダーの問題. Quality Nursing 2002；8（11）：13-22.
- 25) 武田敏：教師のためのエイズ教育読本. 東京：学事出版；1993.
- 26) 武田敏：思春期の学校エイズ教育. 思春期学 2002；20（1）：193-198.